

伊藤 國彦

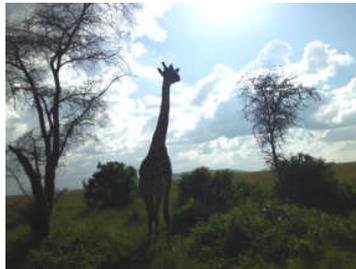
タンザニアにて



昨年末タンザニアを訪問する機会をえました。関空から今話題のホルムズ海峡に隣接するドーハ（カタール）経由でタンザニア連合共和国首都ダルエスサラームまで18時間余、更に国内便にて80分程でキリマンジャロ空港に到着します。ここを起点にンゴロンゴロ自然保護区、セレンゲティ国立公園、オールドヴァイ渓谷、マニヤラ湖国立公園などで野生動物や昆虫などを観察しました。さらにマサイ部落やティンガティンガ村やマコンデ村で、個性的な生活と文化を垣間見ることができました。

動物では、アフリカを代表する大型野生動物（ライオン、ゾウ、キリン、サイ、シマウマ、ヌー、チータ、カバ、ヒョウ、インパラをはじめ多数の偶蹄類、ヒヒやサル仲間など）、多様な野鳥類と独特な昆虫類などの生態の一部が観察でき、映像と異なる野性の姿と迫りに圧倒されました。多くの動物は、保護区内で国を挙げてかなり厳しく保護されており、我々を含む観光客にも多くの制限も加えられています（サファリドライブ中降車厳禁、不用意な声や音などへの注意、全ての自然物の持ち出し禁止、滞在時間制限、宿泊場所の指定と敷地からの外出禁止など）。しかし色々問題がある

ようです。先日、新聞でも報道されていましたが、依然として密猟（主にサイとゾウ）が後を絶たず、昨年密漁された動物はここ5年間でも最大値を示しているようです。いまだに角などに薬理効果があるとの迷信を信じ高額で取引されるためです。密猟法も巧妙になり、音の出ない武器を使って監視員の隙をついて行われているようです。



夕暮れのマサイキリン

ヌーやシマウマなどの移動性草食動物の大群を見ていると、野性は健全に見えましたが、幾種かの動物には絶滅の危機が続いているようです。

さらに原因不明の病気で死に至る動物も増えているようです。最近までは、死体も放置し自然の成り行きに任せていたようですが、伝染性の病原菌やウイルス感染などが警戒され、人の手でその場で焼却処分するようです。今回も、マニヤラ湖国立公園内で処分しきれず放置されたゾウの遺体の悪臭が広範囲に広がっていました。

タンザニアには約15の部族の人々が生活していますが、多くは近代文明の影響をうけ（PCや携帯の普及ぶりは驚く程です）都市部での生活への移行が支配的なようです。短時間ですが出会ったマサイ部落の人々は、

伝統的生活と価値観を大切にすする誇り高い姿勢を示してくれました。伝統的食生活と生活様式を守る。観光客などに媚びない、土産物売りつけたりしない、勝手な写真撮影に応じない、子供を学校などに駆り立てないなどです。理由も説明してくれました。僅かな経験で短絡すべきとも、全てのマサイの人々がそうだとも思いませんが「何を大切にすべきか」という課題に多くの示唆を与えてくれました。

40歳で、警察に誤射されて亡くなったアフリカを代表する動物画家ティンガティンガを慕って集まった画家達の集団生活と活動の場所がティンガティンガ村です。ジミー大西さんも訪れ、若い日本人女性も活動していました。個性的な芸術文化が余り観光化しすぎなければ良いがなどと勝手に思いました。

独立時に活躍したというマコンデ族の村では、伝統的で個性的なマコンデ彫刻が生活の中心を成しているようでした。モチーフが「自然への敬意」と「人々の絆と連帯」だということです。

短時間の滞在でしたが、忘れられない経験になりました。悠々と流れる時間と大草原の中でもう一度自分と自然について考えてみようと思っています。



マサイ族の若者達

伊藤 國彦 氏

1945年生まれ
岡山県立大学名誉教授
絶滅危惧種ウスイロヒョウモントキを中心に県内昆虫相を調査している
日本鱗翅学会自然保護委員会中国地区委員長
(財)おかやま環境ネットワーク評議員